

家畜診療を通じての貧困対策の11年

フィールドにかかわる

野田 浩正

私はエチオピアから戻ってきまして丸2年間経ちました。現在は日本海に浮かぶ隠岐の知夫村というところで、村役場の職員として家畜の診療をおこなっています。それ以前の14年間にわたって、エチオピアという国の一部の地域においてですけれども、家畜診療を通して現地の人たちに関わってきました。庵原さんからのお話にもありましたけれども、エチオピアの貧困や飢餓の問題を考えるときには、旱魃の問題、平和の問題、あるいは土壌流出の問題などいろいろあります。

獣医が欲しい

私がかかわっていましたゴロ郡というところは、アディスアベバから南西に170キロほどいったところですが、標高はいくぶん下がります。低いところでは1500メートルぐらい、その高さになるとマラリアが増えます。それからツェツェバエというアフリカにしかないハエが牛の病気を媒介しています。さいわいエチオピアでは人間がかかるアフリカ眠り病、トリパノソーマの病気がございませんが、私が働いていたところではウシの病気が多かったわけです。

エチオピアでは家畜が非常に重要な意味をもっています。人口が現在6000万~7000万人ぐらいですが、ウシの数だけで3000万頭、これは世界の家畜頭数で考えると10番目ぐらいの多さです。アフリカではダントツで一番です。ウシは、日本でも昔そうでしたが、農耕で使われています。また財産としても使われます。

私が現場に行きました1990年はまだ大旱魃の名残がのこっていて、アメリカからの食糧援助を受けているところでした。食糧援助を受けているのですが、人びとは何を望んでいたのだしよ

うか。それは単純に食糧がない、飢えているから食糧をあげればいいんだ、ということではありませんでした。彼らは「自分たちには肥沃で十分な土地がある、雨も降る、だけれども食糧がつかれないのはなぜなのか？」と問いかけ、その理由を「このトリパノソーマによって私たちは十分な土地を耕せていないんだ」と考えました。だから「獣医が欲しい」ということでした。このことは彼らは政府にも訴えていましたが、誰もきてくれなかったそうです。

当時、私は青年海外協力隊員としてアディスアベバで働いていました。この現場には別の日本人の農業技術者がおまして、彼からのアプローチがありましたから、私は出かけて行きました。そしてこの場所で家畜の診療を始めようということで、FHI(Food for the Hungry International)という民間の援助団体の一員として、最初は3年間で帰ってこようと思っていたのですが、気がついたら合計13年以上居ることになりました。その間のお話をしたいと思います

援助が必要ではない状態

私が関わった地域には二つの郡があります。アメヤ郡とゴロ郡。このうちの標高1500~1800メートルのなだらかなところに40ほどの村があります。これらの村にたくさんウシがいるのですが、ほとんどが病気になっていました。とにかくひとつひとつ村をしらみつぶしにいこう、と。私がいたプロジェクトには50人程度のエチオピア人が働いていましたが、家畜の診療に関しては、担当していたのは私を含めてたった5人だけ。この5人が一台の車に乗って、今日はこの村、明日はあの村といった形で出かけていきまして、村人が連

れてきたウシを毎日診療していました。一番多いときは一日に800頭のウシに注射をしたことがあります。日本でも人気のお医者さんは非常に多くの患者さんを診られると思いますが、さすがに800頭のウシに注射を打つ獣医は、エチオピアにも私以外にはいなかったようです。

そういうことで8年間にわたる家畜診療、ならびに撲滅はできなかつたのですがツェツェバエの数を減らすためのいろんな仕事によって、ウシの病気は減ってきました。そのために最初は食糧援助でしかやっていけないという状態から、たった3年か4年で「もう食糧援助はいりません、自分たちで耕せます」という風が変わってきました。

エチオピアの冬は雨季です。この時期になるとぬかるみがひどくなります。田んぼのなかのような道を歩かないと行けない、そういう場所がいくつもあります。たった8キロの道のりですが車ででは行けません。歩いて行くときに長靴をはいてぬかるみの中を歩きます。するとあるときズボットぬかるみにはまってしまつて、長靴の中にまで泥水が入ってしまいました。「汚くなったなあ」と思つて長靴を脱いで靴下を脱ぎました。それで長靴を履きなおして改めて歩き始めたのですが、1キロも歩かないうちに足の裏に大きなマメができて、ベロツとはがれてもう歩けなくなつてしまいました。私が背負っていたものを農家の人たちが全部背負ってくれて、それで次の村まで行ったことがあります。その村の農家に泊めてもらつて、翌日は次の村に出かけて診療をして、そこで泊めてもらう。そういうところで村の人たちの情けを非常に感じました。自分たちが食べるものまで「よくいらつしゃいました。お客さん、どうぞ」と言つて出してくださる。私は援助をしてあげる、やつてあげる、という立場のものであつたのに、援助を受けているはずの彼らからいただく、してもらうという経験をさせてもらいました。

泊めてもらつて、彼らが出す飲み水・食事をいただいて、彼らが出す焼酎や地ビールを飲みながらじっくり話し込んで、「あなたたちは何が望みなのですか、これからどう変わっていききたいのですか」という話をとにかく彼らと毎日のようにやつてきたかな、と思います。そして徐々に変わつてきて、彼らの家畜が守られて、そして援助が必要ではない状態になつた。

農業協同組合の発足

そのあと私が何をやつたのかというと、これは彼らのアイデアから出てきたのですが、なんとか彼らにウシの診療を引き継いでもらうことです。いつまでもこの野田という人間が残つて診療ができるわけではありません。現に私は向こうで肝炎と腸チフスにかかりました。三日間、意識不明の重態になつて死にかけてケニアまで運ばれました。その節は大使館のみなさん方にお世話になりました。そういうことをやつたものですから、本当に自分がいなくなつたときに、この人たちがどうなるのだろうか、と思つたわけです。

それで私が信頼してしまつた部下の二人に診療の資格を取らせるといふことに思い至りました。これも自分一人の力ではすることができず、まわりのエチオピア人の仲間たちをつかつて州政府にまで駆け込んで、やつとNGOから初めて、家畜診療を担う獣医の専門学校に行かせてもらいました。掟破りのパターンだつたみたいですが、そういうことで二人のスタッフを勉強させて、実際に資格を取らせました。

そのあとに農業協同組合をつくりました。農家の人たちは、

「昔知つていたよ。だけどそれは社会主義の官僚主義と重なつて破綻してしまつたんだ。うまくいくはずがない」というわけです。でも、

「そうだろうか。一緒に考えよう。一緒にやつていこうじゃないか。あのときは村人全員が組合員で、すこし儲かつても利益が分散しすぎたために一人一人では儲かつていなかったんじゃないか。やる気のある農家さんだけ集まりましょう」と提案しました。

ひとつの農協は26人で発足して、もうひとつは45人ぐらいで発足しましたが、儲かるということが分かつていつのまにか200人ぐらいの組合員になつてしまいました。その農協で家畜診療をやつてもらつた。また農協は農協だけでお金を儲けなさいいけない。そのためにどうするか。ひとつは製粉所をつくつてあげました。現地の人たちはパンを焼くために石で粉を挽きます。それをディーゼルエンジンでまわして粉を挽き、製粉所でお金をもらいます。そのお金で農協を運営していきました。

もうひとつは、日本大使館から草の根無償資金援助でトラクターを買っていただきました。すでに彼らは2ヘクタールの土地をもっていました。その昔、ウシが病気のときは1ヘクタールも耕せなかったのです。ところがいまでは3ヘクタールまで開墾していました。でもいまあるウシの頭数と労力だけでは耕作が間に合わない。なにしろウシばかりで、エサも足りなくなってきました。

そこで、トラクターを農協に託して耕作サービスをしました。儲かりました。そういうことで8年間私は家畜診療をして、そのあと3年あまり、現地の人たちに仕事を任せて様子をうかがっていました。

彼らだけでやっていける

農協をやっていると使い込みがあります。失敗もあります。ちょっとぐらい悪さをするやつもいます。でもそれを私たち外国人の目でコメントするのではなく、農家の人たちや地域の政府の役人がきちんとチェックして直していきましようという意識が育ち、自分たちでものを管理できる状態になってきましたから、「これはもう外国人が関わる援助はいらん。おしまい」と思って支援プロジェクトを完了しました。

そういうわけで、11年あまりにわたった私の現地での働きを終えて、帰国しました。それから2年間のあいだ、私の後任が現地の近くの村で働いています。彼から聞くとその農協はますます発展しているそうです。エチオピアはこの数年にわたって旱魃を受けていますが、あのあたりでは毎年のように豊作で、餓死者が出ているという話もなかった。かつては病気や食糧不足のために死んでいた人の多かった地域が、自立することができた

のです。

これまでの援助のやり方のなかでは、いつも私たちが「気の毒だから」、「私たちは豊かだが、彼らはいへんだな」といった上から下を見下ろすような見方をしてきました。だからこそ彼らはいつまでたっても受け手側の立場で、自分で動くとはしませんでした。でもそうではない、彼らと一緒に同じところで飯を食う、同じところで暮らし同じところで考えるということ、自分の考え方のなかにもってきたときに、「この人たちにこういう可能性があったのか。こういうことが自分たちでできるんだ。ああよかった」と思いました。そういう見方をしたのが成功だったか、と思っております。

そして、知夫村ではたらく

援助の世界ではいまだにモノをつくったりとかあげたりといったことが多いですが、これからは人を育てる、JICAの新しい理念にもありましたが、本当に現場主義で人を育てていく、ということで、これからの世界が援助・非援助国の関係ではなく、お互いの友好的パートナーシップを結べる、そういった形に変わっていきけるのではないかと思っております。

日本に帰ってきました、いま私は日本の村役場で働いています。日本でも新たに感じました。さまざまな問題がある。地方の切り捨てがある、高齢化の問題がある。そういったさまざまな問題を抱えている場所で、10年、20年、一緒に暮らしながらこの知夫村で何かを始められたらいいな、と思って日ごろがんばっております。

ご静聴ありがとうございました。

(のだ・ひろまさ/知夫村役場・元FHIエチオピア)